

劇団「THE 屋久☆座」

二〇一八年二月公演

如竹散人乱拍子

(じよちくさんじんみだれびようし)

作 松本 淳子

登場人物

泊市兵衛・日章・如竹 真辺幸星
日流（ニチリュウ 屋久島粟穂村本佛寺住職）渡辺浩
日逕（ニチケイ 京都本能寺・本興寺管主；種子島出身）近藤茂夫
学僧（尼崎本興寺）勘場奈美
亀女（粟穂村に住みついた歩き巫女？ 年齢不詳）松本淳子
女1（いね）井坪美紀
女2（たき）川村磨利依
女3（みつ）小林律子
女4（とよ）豊住浩子
柳酒屋（堺の商人・法華宗本能寺の大スポンサー）松田悠
上妻宗重（種子島家臣）荒井道知
上妻重盛（宗重の叔父）屋富祖克己
少女・春・神？（年齢不詳）中井川恵
百姓1（東国の）近藤茂夫（2役）
百姓2（東国の）下川幸乃（高校生）
小僧の声 下川幸乃（2役）
村人 如竹以外の全員
黒衣 登場していない全員
音楽 日高昭代 山田実 荒井道知
衣装・振付 岩山鶴美
照明 竹之内美幸 下川利子
音響
演出 松本淳子

会場は離島開発総合センター（五〇〇人収容）ただしワンステージ150人〜200人と
して、舞台と客席を近づけ「小劇場」のように使う。
天井の反響版を上部の音抜け防止に、可動式を両脇に設置する。
照明・音響・幕については「ありものを最大限工夫して役立てる」
役者の声はマイクでは拾わない。場面転換や歌、効果音は原則としてシンセサイザーを使
用する。

第一場 本佛寺（日章十八歳）

（紋り）幕前での芝居。幕前中央には座布団が一枚と木魚が置いてある。猫の鳴き声、その声を追って日流が上手より登場する。その後、日流が竹を持っている。

日流 たま、たまたま（と、猫を呼ぶがたまは逃げた）なあ日章（と、振り返り）いいか、
たまたま、そうたまたまであつたとしてもそのたまたまは縁というものなのだ。

日章 はい和尚様、たまたまもまた縁でございますね。

日流 例えば東国安房（とうごくあわ）の国と聞いたとき、この粟穂村（あわほむら）
の人々は？

日章 （大袈裟に）似ている、そう思う筈でございます。

日流 （突然口調が変わって）ここで問題です。東国安房の国は五百年後、何という地
名になっているでしょう？

日章 え、おそらくは千葉県、うぐん鴨川市？

日流 （和尚に戻って）正解じゃ、では薬王丸（やくおうまる）と聞いたならば 何を
思いだす？

日章 はい、屋久貝を、そして更にはわれらが住まいするこの屋久島のことであろうか
と考えるのではないでしょうか。

日流 ちなみに薬王丸とは今から三百五十年前、東国安房の国の端っこ貧しい漁村に生
を受けた日蓮大聖人の幼き日の名前でございます。

日章、その通りだ。最初で何やら聞いたことのある言葉が出てきたら、誰でもそ
の後は「どんな話になるであろうか」と興味をひかれるはずじゃ。

日章 はい。

日流 じゃつど、そのたまたまはたまたまのまま、決してだまだまにしてはならぬ。

日章 和尚様、だまだまとは何でございましょう？

日流 たまたまのご縁を大仰（おおぎよう）に取り扱うとそれはだまだま、まるで生煮え
の米のようになる。つまりは、（声色を変えて）「これは偶然ではなく必然です」
などと薄っぺらなことを申してはならぬ。たとえ良いご縁であっても そのこと
にとらわれるな、ということじゃ。

日章 （何かを発見したように）はい、わかり申した。

日流 では昨日の続きをまずわしがやってみるから、日章も続いて来なさい。えーと確
か昨日は……（と、手元の経を繰る）日蓮大聖人が齡（よわい）十五で出家、と
いうところまでじゃったな。

日章 はい。

二人は舞台の中央に座り、日流居住まいを正して大きく息を吸い込み語り始める。この後日章は日流の木魚を打つが、日流は打たせたくない。

日流

(講談語りのように) 日蓮大聖人が齡十五で出家した。やがて比叡山(ひえいざん)にのぼり、横川(よかわ)の宿坊(しゆくぼう)に住まいし、昼は熱心に経を読み、夜は註釈書(ちゆうしゃくしょ)に目を貼りつけて一言一句の解釈もおろそかにはいたすまじと、寝る間も惜しんで勉強に励んだ。(木魚をたたく) 修行の日月(じつげつ) 干支(えと)をひとめぐり、口数少なく目は血走り、周りの者達も恐るる風貌(ふうぼう)となりぬ。(木魚をたたく)

日章

(講談語りのように) やがて比叡山(ひえいざん)にのぼり、横川(よかわ)の宿坊(しゆくぼう)に住まいし、昼は熱心に経を読み、夜は註釈書(ちゆうしゃくしゃくしょ)に目を貼りつけて一言一句の解釈もおろそかにはいたすまじと、寝る間も惜しんで勉強に励んだ。(竹筒を打つ) 修行の日月(じつげつ) 干支(えと)をひとめぐり、口数少なく目は血走り、周りの者達も恐るる風貌(ふうぼう)となりぬ。(竹筒を打つ) (急に口調を変えて) お題目を唱えれば良いと言うだけでなく、字が読めない村の衆に日蓮大聖人の生涯を分かり易く語って聞かせようという、和尚様の素晴らしいお考え、このこと自体が功德(くどく)でございます。

日流

本当か？

日章

はい。

日流

本当にこれが文字の読めない村の衆にとって分かり易くて面白いと思うか？

日章

は、はい。

日流

そうかのう？ (と、日章の本心を探るように顔を伺う)

日章

和尚様、「これはこれ」でよろしいのですが、あの話し、やはりあの話しが私は好みでございます。

日流

あの話し？

日章

「常不輕菩薩(じょうぶきしょうぼさつ)様のお話しでございます。(日流の木魚を打ち日流を乗せる) 不輕大士(ぶきょうだいし)ぞ あはれなる。

日流

(村人にやさしく語って聞かせるような口調で) 法華経という正しい教えを得ていないのに 悟りを得たと、おごり高ぶる者の満ちあふれる時代に、一人の僧がおった。その僧はな、いつなんどき誰と出会っても、その人の前に行っては手合わせ……

日章

我深敬汝(がじんきょうにょ)と唱へつつ。(木魚を二つ)

日流

(村人にやさしく語って聞かせるような口調で) 私はあなたを敬(うやま)い、決して軽(かる)んじるようなことをいたしません。あなたはきつと修行を重ねて仏様になるお方です、と言ったそうじゃ。

日章 打ち罵（ののし）り悪しき人も皆救ひて羅漢（らかん）と成しければ

日流 （村人にやさしく語って聞かせるような口調で）じゃっど突然そんなことを言われたほうはたまがってな、いや逆に馬鹿にされたと感じて棒で打ち、石を投げて追い払おうとするが、その僧は決して怒ったり民衆を軽蔑したりすることなく、するりと身をかかわしてまた同じように手を合わせて拝んだのじゃ。そうやって民衆を救い、その後でようやく僧自身も成仏したということだ。（木魚を打ちながら）南無妙法蓮華経。

日章 するりと身をかわした。（と、納得して）なる程。

日流 いいか日章。（和尚の威厳を持って）我々凡人は「お経」という船を造ることはできないが、それに乗り込んで水先案内人となることはできるのじゃぞ。

日章 はい。

日流 （威厳を持って）じゃっど水先案内人とは過酷なお役目だ。船の舳先（へさき）に乗って、船の進むべき道を教える、もし、嵐が来たり海の中の岩を見つげられずに座礁したとなれば一番初めに海に突き落とされる、それが水先案内人だ。

日章 和尚様!?

日流 なあに、心配は無用じゃ。船大工泊太次衛門（とまりたじえもん）の息子であるお前はこまなか時から泳ぎが達者であるからな。これからも泳ぎの鍛錬を抜かりなくするのじゃぞ。

日章 はい。するりと身をかわし、泳ぎもまた、すいすいと。（と、立ち泳ぎの抜き手をする）

日流 いいか日章、十年後にはお前がこの村の、いやこの島の民を乗せた 法華経という船の水先案内人になるのじゃから、必ずや出世して戻って来い。

日章 はい、和尚様。出世するまではこの島には戻らないと心を決め修行に励み申す。本日も良か調子でございました。

犬（？）の鳴き声、日流に続いて日章も下手へ退場。

絞り幕が上がると同時に舞台明転。

舞台上手に粗末な産小屋（うぶごや）のようなものの入り口が現れる。その前に甕（かめ）が置いてある。村の女達は藻塩焼きの作業をしながら板付き。日章が下手から竹筒を持って登場。

とよ （日章が出て来るのを見て）今な、この頃の和尚さんの説法が面白うなったって話しばしちよったところじゃ。

日章 じゃろ、おいもそう思う。（と、得意げに言っって竹筒を打つ）

たき こないだの「常不輕菩薩（じょうぶきょうぼさつ）」様の話は本に良か話じやった。

みつ おいはよ、あのほら龍の女子の話しが面白か。

たき ああ、業の深い女子も女子のままに救われるって話しやな？

みつ なあ、日章さん、あの女子の龍が大切に持った宝の玉。

日章 宝珠（ほうじゆ）のことか？

みつ うん、その宝珠っていけんな玉やるか？

日章 いけんな玉って、あいは悟りの印の玉じゃ。

みつ 屋久貝（ヤコウガイ）みたいなやつやなか。

とよ ああ確かに屋久貝は磨いたらキラキラと虹のごと光るけんな。

みつ じゃろ？ こん島の海には宝珠があふれちよつど。悟りの印じゃ宝珠、宝珠。（と

歌いながら踊る）

とよ （みつに）じゃつども何回も何回も磨かな光らん、難儀なこつちやど。

みつ ああ、難儀なこつちも修行もおいは好かんよ。（と、意気消沈）

たき 龍の話しも、女子の話しも、宝珠の話しも、屋久島のことじゃ。

日章 うん、おいも最初は魂がった。じゃつでお経を読めるようになったら和尚さんが知っている話しを自分も知ることができるとち思うてな。

女達 （はん、はん。）

日章 それを和尚さんに話したら、和尚さんがな……。

女達 （あん、なんち？）

日章 学問というのは世界を広げてくれるもんだ、特にこの「妙法蓮華経」はずつとずつと遠い宇宙、お前の心のずつとずつと深いところまで見せてくれるもんじゃ、つて。

たき ずつとずつと遠い宇宙、心のずつとずつと深いところ？

日章 文字を覚えて言葉覚えて今まで知らなかったことを知ったら、このふたつのまなこで見えていたつもりの物まで、まったく違う物のように見えたのじゃ。ほんに学問とは、物を知るつちゆうことは面白いことじゃ思うた。

たき これもまたよか話じゃ、じゃつどもうすぐ日章さんのこん話も聞けんようなる。

みつ 日章さんは、都に出て和尚様になるための学問をするって聞いたが、本当か？

日章 （改まって）はい、島を出て尼崎の本興寺に学僧として入ることが決まり申した。

と、言いながら竹筒を連打する。

みつ もう帰って来んの？

日章 うんにや、勉強に精を出して出世して帰って来るがよ。

たき いつ？

日章 うん十年位やるか。そうしたら、和尚様を助けてこん寺を盛り上げるんじゃ。

たき 日章さんならきつと、寺を盛り上げることがでるやろな。

日章 出世して偉い坊さんになって、皆に学問を教える寺にするんじゃ。
たき ああ日章さん、頼もしか。

みつ 十年か……よかニセになって帰ってくるやるな。(と、たきに)

たき なあ日章さん、ひとりで寂しゅうなとか？

日章 おいが入る本興寺はこの寺の親寺で西国からも大勢の衆が行っているそうじゃ。

そしてそのまた親寺が本能寺、じゃっから寂しいことはなか。

みつ 本能寺ってあの本能寺か？

日章 ああ五年前に織田殿が討たれた、あの本能寺だ。そしてそこには種子島出身の日
逕殿がおって焼かれた寺の再建に尽力しておられる。(竹を打つ) おいはそれを手
伝うんじゃ。(竹を打つ)

とよ なして竹ってそげなうるさか音なんじゃ？

みつ (とよに) 中が空っぽだからやろ。

たき なあ、どげなところなんじゃろな、都って。

日章 羽柴殿の天下になって戦もおさまり今では平和な法華の巷(ちまた) になってい
るそうじゃ。

たき 法華のち・ま・た？

日章 ああ、いつも街中に「南無妙法蓮華経」を唱える声が響いているらしい。あのな、
都では猫までが「南無妙法蓮華経」と鳴くんじゃって。

女達 にゃんみょうみょううんめみょう(？)

たま(猫)の声再び、女達笑う。

日章 法華の巷と言えば本当はここも一緒じゃけどな。

とよ へえ、屋久島も法華の巷ってか？

日章 百年前日増上人が法力を持って永田で山の神を折伏(しゃくぶく)した時から、
こん島の寺は皆法華宗に変わったわけだから、ここも言ってみれば法華の巷じゃ。
たき しゃく・ぶく？

日章 南無妙法蓮華経の力で……。

みつ (日章のセリフにかぶせて) 山鳴りを鎮めたって話しか？

日章 そうじゃ、天晴れなことやろ？

とよ うーん、じゃっどもな。

日章 じゃっども、何じゃ、じゃっどもって？

みつ あたいげの猫は「南無妙法蓮華経」とは鳴かん。

とよ そげなことじゃなくて、山ん神様は法華のまじないなんぞで閉じ込められはせん
て、亀女さんが言うとった。

日章 何を言うか「南無妙法蓮華経」はどんな荒ぶる神をも鎮めることができるありが

たーいお言葉じゃ。

とよ

じゃっど山鳴りがおさまったのはその時だけじゃった、それからまた何年もしたら同じような山鳴りがおこったそうじゃ。その時に山鳴りを鎮めたのが、三代前の亀女さんじゃ。

産小屋から亀女が水桶を抱えて出て来る。

日章

そんなん、嘘じゃ。

たき

三代前って、亀女さんの婆様？

亀女

ああ。

とよ

なんでも山ん神様に話しを聞いたたら、閉じ込められたことが気にいらんかったらしい。なあ亀女さん。

日章

山ん神と話ばしたつち？

女達

ああ、そうじゃ。

日章

山ん神と話しをしたなんて、また、そんな寝言を！

女達

寝言じゃなか。

亀女

ああ、寝言でも嘘でもなかど。

日章

亀女さんまでそうやっておいを騙そうとして。

亀女

騙すもなにも、本当のことじゃもの。誰だって閉じ込められたら出口を探して暴れるじゃろが。

とよ

そうじゃ、日章さんも閉じ込められたら暴れるに決まっちよろが？

日章

ふん、誰もおいのことを閉じ込めることはできん。もしそんな奴が現れたらこうやって「南無妙法蓮華経」の力で退散させてやるが。(と、とよに掌から気を出す)

とよ

(日章の気を受けとめる、またはふいとかわして) ふん。(と、鼻で笑い) 修行が足りんな。

たき

亀女さん、そうしたらおとろしか神様は閉じ込めたらいかんのですか？

亀女

ああ、神様は閉じ込めるのではなく祀らにやいかんてことだ。

女達

じゃ、そうじゃな。(と、納得して頷く)

亀女

土地っちゅうもんはなあらゆることを記憶しているもんじゃ。山鳴りも大雨も地震もそして花が咲くことも何もかも記憶しておる。山鳴りが鎮まったということもちゃんと記憶しておる。しかしな、鎮まったのはいなくなっただとは違うぞ。

神様を締め出したり閉じ込めたりして人はどうやって生きていけると思う。なあ

日章、よおく覚えておけや。

女達

(たき以外) なあ、日章よおく覚えておけや。

日章

ふん。

日流

日章、おい日章。(と、遠くで叫ぶ声)

日章 和尚様だ。はい、只今。(と下手に退場)

亀女も産小屋の中に入って行く。代わって水汲みおんないねが登場する。桶の水を亀女の為に汲んで来たようだ。また持って来たシャクナゲの枝を産小屋の前の甕に挿す。

いね いやあ、昨夜はよう降ったなあ、じゃつど大雨の後は山も川も美しゅうなる。
みつ みんな洗われてきれいになった。

いね 船はいけんやった、無事やったか？ (と、とよに)

とよ ああ、村の船は大風の前にみんなで陸に上げよったから無事やった。男ん衆は早うから浜に出て漁の支度をしちよる。

いね 近頃はこの村の男ん衆もずいぶんと働き者になった。

女達 (口々に) じゃ、じゃつどな。

みつ 何とか禁止とかいうお触れが出たからじゃる。

いね (引き取って) 「海賊禁止令」な。

とよ そのせいじゃ、難破した船から積み荷を頂戴することができんようになったから、稼ぎがばつたい減ったのは。

みつ 嵐がきて翌朝難破船がなかって探すのが何よりの楽しみやったのにな。今はつまらん。

たき じゃつどもそのお蔭で男ん衆が熱心に漁をして魚(いお)ば採って、そいを女子ん衆が張り切って燻したり塩漬けにして銭に換えるつちゅうのは良かことのように思わんか？ (いねから柄杓に入った水を渡される)

とよ うんにや、もう琉球船の米や嶋織物が手に入らんちゅうのは残念やど。

たき (水を飲み) ああ！ (と、感嘆の声を上げる)

いね どうや？

たき うんまい。

いね じゃろ？ 亀女さんに汲んで来た若返りのやもん。

たき 若返りの水？

いね ああ地面に浸み込んでそれが岩の割れ目からちよろちよると、そうじゃちよろちよろつとしか出て来ん水じゃ。木の肌とかな、葉っぱの下、根っこの間、土の中を通過つてようやく出て来た特別な水じゃ。

みつ あ、おいも飲みたか。

とよ おいにもくれんか。

いね よかよ。(と、一人に水を汲んで渡す)

みつ (飲んで) うん、うんまい。

とよ 甘露じゃ甘露。

いね (皆に) なあ、今小豆島(しょうどしま)の衆が大勢山ん中に入ってるじゃろ？
たき 関白殿がこん島の太か木ば召し上げになったそうじゃな。

みつ 関白殿お召し上げく。

とよ なんでも都に大きな大仏殿を造るらしい、方広寺っちゅうたか？

いね なあ明日皆で一緒に見に行かんか？

たき ええ？ 何を？

いね だからどうやって太か木ば伐っておるのか見にくんじゃ。

とよ 行かん行かん、女子は山に入ったらいかんて言うやろが。(と、上手に退場する)

みつ 山姫様は自分よりもきれいか女子を見たら焼きもちば焼いて谷に突き落とすそう

じゃ。だから残念なことに、おいは行ったらいかんのよ。(と、上手に退場する)
いね ふん、どんだけ自信満々や。(たきに) お前は行くやろ？

たき ……女子は山に入ったらいかんて前に姉さん言うとったじゃろ。(と、上手に逃
げる)

いね 男のなりばして隠れておれば見つからんて、なあ、行ってみようや。(と、追いか
ける)

上手からアオスジアゲハが飛ぶ(黒衣)。一人の女(はる)が上手か
ら登場する。

日章、女(はる)の美貌に戸惑いながらの場面。

はる 小僧さん。

日章 小僧さん…(俺の事か?) 何じゃ、いや何のご用でございましょうか？

はる (深々とお辞儀をして) 本日はまことに好い日でございます。ですの！

日章 は、はい。(と、同じようにお辞儀をして)

はる 笑っても、よろしいでしょうか？

日章 え、え？ 何て？ (独白) 何を言うちよつか、おかしな女子じゃ。

はる (強い口調で) 春、春だから笑ってもいいかと聞いているのです。

日章 (キャラ代わりにびっくりして) 春？ 春という名前なのか？

はる いえ、春がはずんでいるから。(と、陽射しや木々の香りを味わうように)

日章 ……。おかしかもんじゃ。(訝しく思いながらもその行動を見ている) なあ、どこ
から、お前はどこから来た女子じゃ？ 宮之浦か、それとも楠川か？

はる ♪はるの宵は(扇子を振って首を傾げてほほ笑む、すると花がひとつ咲く)

日章 (花が咲いたことに気が付いていない) あ、永田か？ 吉田の平家の筋か？

はる ♪あなたに抱かれ(日章に触れて、首を傾げてほほ笑む、するとまた花がひとつ
咲く)

日章
はる
（激しく動揺し、はるを振り切つて）奄美の衆か、それとも琉球から来た衆か？
♪夢見心地の（扇子を揺らして首を傾げてほほ笑む、するとまた花がひとつ咲く）
ゆらゆらゆらり

日章
（ようやく花に気づき）あ、そうじゃそうじゃ、小豆島の船に乗って来たのじゃ
なにか？

女2・3・4 が戻って来る。はじめ日章の様子を遠巻きに見ている。女達にははるの姿は見えていない。

とよ
あれ、日章さん一人でぶつぶつ言いながら何をしちよつどやろか？（と、物陰に隠れる、その後女2・3も合流する）

日章その後はるの動きに合わせるように動く。二人はいつの間にか
扇子の両端を持って道行きの様にも見える。

はる
♪春の宵はあなたに抱かれ夢見心地のゆらゆらゆらり（踊るように動きながら）
春だから、喜びが波のように押し寄せて、体の中に満ちてきて、ザザー、ザザー、
あ、もう我慢できない。ふ・ふ・ふ、ははは、ははははは。

舞台は光の粒が飛んでいるようだ。

はる笑いながら退場する。

日章
笑ったら、ひとつふたつみつと花が……えー、何じゃあれは一体。じゃつど見た
こともなか程に美しか女子じゃった。 ああ、いかん（と、股間を押さえる）い
かん邪念が、修行の邪魔じゃ。

と、言いながらはるが退場した下手へ去る。女達上手より走り入る。

とよ
おい、見たか日章さんの法力？
たき
このシヤクダンバナ、姉さんが持って来た時にはまだまだ蕾は固かったはずじゃ。
とよ
日章さんが何やらぶつぶつと呪文を唱えながら踊りば踊ったら、たちまちこのと
おりじゃ。

みつ
あいが本当に法力か？（真似をしながら）じゃつど見たことのないおかしな踊
りじゃったなあ、ははははは。（花がひとつ落ちる？）
たき
やっぱり日章様も法力を持った人だったんじゃ！

照明が絞られる。

以下の歌の間に赤いたすきをかけて、竹笹を持つ。

亀女の声

荒き御魂をば鎮めよ

緋（アケ）の縷（カズラ）を 額（ヌカ）につけ

赤き幡鉾（ハタホコ）を かかげ

地の神 水の神 海の神 怒りおさめよ 魂鎮めよ

和御霊（ににぎのみたま）のなすままに

和御霊（ににぎのみたま）のなすままに

舞台明転 客席に向かって。

女達

（口々に例えば）日章さん、元気だな。出世して戻って来いよ。日章さん元気でな。都で寂しゆうなったらおいの事を思い出せよ。（と、手を振る）

みつ

さて、日章さんを見送った後はトビウオでもよぶか。

とよ

そうじゃな、辛気臭い坊さんよりもトビウオの方がよかもんな。

たき

そげなこと言うたらバチがあたろうもん。

とよ

なあに構うもんかい。なあ。（と、みつに）

みつ

ああ。

女達

（声を合わせて）べったいべったい、おしよいおしよい。（と、下手へ退場）

入れ替わって亀女と日流が奥から登場。

亀女

おお、行っちゃまった、行っちゃまったあ。

日流

ああ、行っちゃまった。

亀女

寂しうなるな。

日流

じゃつどまだ小僧が何人かおるから、そげなことも言ってはおられん。（と去りかける）

亀女

（その背中に）こんたび、本当にお前は日章に助けられた。

日流

何がや？（と、戻って来る）

亀女

本能寺再建に屋久島から送った嶋織物（しまおりもの）・赤緞子（あかどんす）では不足だと言って来たのじゃろ？ 尼崎、堺の商人が屋久島の山奥にある杉のうずら紋を欲しがっているから調達せよと本寺からの命令じゃったのやろ？

日流 知っておったのか？

亀女 当たり前じゃ。

日流 そうか……それならば話しは早い。亀女さんよ、奥岳はとんでもない宝の山らしいぞ。

亀女 そうらしいな。こん島は舒明天皇の頃より宝の島と呼ばれておった。

日流 じゃつど太か木は根回りが岩のごとある、伐るのは余程、難儀じゃぞ。

亀女 村の衆に加勢を頼むしかなる、口八丁手八丁、まあそこはお前の腕の見せ所じゃろが。

日流 うん、どうやったって、わし一人では太か木は伐れんからな。

亀女 あのな、日逕和尚が本能寺で出世できたのは種子島鉄砲の調達ができたからじゃ。

日流 日章も出世しようと思つたら屋久島の山の材を土産にするしかなかろうが。

亀女 本章にはこの村のためにも偉い坊さんになつてもらわないけんからなあ。

小僧 本にそうじゃ。お前もおいも若返りの水ば飲んでまだまだ元気でおらねばな。

小僧 (舞台奥から) 和尚様、和尚様。

日流 こら、人を遠くから呼ばれるものではないと何度教えたらわかるんじゃ。

小僧 (舞台奥から) 早う話しを聞かきたかよ。

日流 そうか、わしの話しを聞きたいか。

小僧 (舞台奥から) うん、はよう、はよう。

日流 そうか、そうか、では、では、さても、さても、小僧を相手に説法の練習をしよ
うかのう。

日流が下手に去り、亀女は小屋の中に退場。舞台暗転。

黒衣が登場し「あつと言う間に十年後」の御触れ声。

屋久島本佛寺前・十年後

舞台明転 屋久島の女達が下手から登場する。

みつ 今日和尚さんの話し、難し過ぎてあたま巻き切つたが。

とよ 居眠りしちよって何が難しかや。

みつ 夢ん中でもちやんと聞いちよつと。最後は地藏さんがわらわらと出てきた話しや
つたろ？

たき あと、和尚さん、方広寺の大仏殿が火事になつたちゆう話しもしちよつたな。

みつ あれはおかしか話しじゃ、なして火事になつた？

とよ 大仏を造る時に溶かした銅が流れ出て、それで燃えたとつて言うちよつたろうが。

みつ なあ、そうしたらよ、大仏殿の中には今まで大仏さんはおらんかつたのか？

とよ ほら何年か前に大きな地震があつたやろ、そんな時に頭が落ちたがよ。

みつ ああ、そうやったか。

たき 小豆島の衆が三百人もやって来て、ここからも大仏殿の材を運んだのにな。

みつ ああ、覚えておる。おい達がまだ娘やった頃のことや。

とよ 若うてびちびちしてたなあん時は。

みつ なあ、あの頃寺にいた小僧さん……。

たき 日章さん？

みつ じゃったじゃった。今頃いけんしとるやろね？

とよ 都さめ行つて十年位したら戻つて来るって言つてたよな。

みつ もつたいなか話じゃ。

たき 日章さんがか？

みつ うんにや、ここから運んだ太か材じゃ。

とよ この島の太か材が火事で焼けたつて聞いただけでも、悲しゅうなる、な。

みつ まあな、お召し上げくじゃから仕方がなかつたことじゃ。山の木は隠せんもん。

みつ・とよは下手へ退場。たきはそのまま残つて亀女の小屋へ。

たき 亀女さん、昨日島津の役人と樵の衆が峠を越えてここの川筋を上つて行きよつた。とうとうここまで来たか。

いね (上手より登場しながら) これ以上他所の衆におい達の山の木が伐られたらおいは黙つたらんからね。

亀女 黙つたらん言うても向こうは刀を持つてる、喧嘩をして敵う相手じゃなかるか？

いね じゃつど、このまま指を咥えて見てるのは嫌じゃ！ (たきに向かつて) お前は

何ともないのか我が家の裏山を踏み荒らされて、木を盗られて！

たき おいやつて嫌なのは同じじゃ、日章さんの出世のためにここまでやつて来たんじやもの。

亀女 じゃつどもそうやつて頭に血を上らせるだけが喧嘩の仕方やなかるう！

いね (嘆息) やつらを奥岳に行かせんようにするにはいげんしたらよかとじゃるか？ (少し考えて) 向こうが「屋久島置目」という法をつくつたなら、こっちは関所

ばつくつて銭を取つたらいけんやるか？ ここはおい達の山や！ って。

いね そうじゃ、昔は、海を往来する船から取つていた津料も今では取れんようになった、そんな代わり今度は山に入るやつらから取ればいいつてつてことじゃな。

たき そうすれば村の衆は難儀して木を伐ることをせんでも銭やら米が入つて来るつてことじゃ、なかか？

いね そうじゃな、男ん衆に言う前に、和尚さんに相談ばしてみようや。(と、退場)

たき うん。(と、続いて退場)

亀女二人を見送って、舞台暗転。

第二場 同じ頃、尼崎本興寺

「同じ頃 尼崎本興寺では」

舞台中央に長机がひとつ。日章と学僧が作務姿で本を抱えて登場。

二人は寺の蔵書の目録をつくる作業をしている。何冊かの本を記録したところで。

日章 この三冊は東側『ろ』と書いてある棚に頼む。

学僧 はい。(と、その本を持って立ち上がり、行きかけながら) 日章殿、いよいよでございますね。

日章 何がじゃ？

学僧 何がって、先程からそわそわされておられるのは日逕殿、貫主様のことでございましょう？

日章 ああ、日逕殿が本能寺と本興寺ふたつの寺の貫主様になられたとは本にめでたいことじゃ。これはひとえに本能寺再建の功を認められたもの。

学僧 日章殿、そしてそれは貫主様の手足となって働いた日章殿の手柄でもございます。(と、言いながら奥へ)

日章 確かにわしは京の街中(まちなか)はもちろん、山間(やまあい)の村、海辺の村を歩きまわり勸進僧として浄財を集めて参った。

学僧 (再び戻って来て) ええ、そして貫主様の強い信頼を得ましてございます。

日章 わしは屋久島本佛寺の和尚様の言いつけに従ったまでのことじゃ。これは西側の『な』と書いてあるところへ。

学僧 はい、(その本を持って) そうは言っても、期待せぬわけには参りませぬ。

日章 日逕殿の大出世(だいしゅっせ)は都から遠く離れた西国の果て、辺境の島にも喜びをもたらす吉報、種子島の寺でも大喜びしておるじゃろな。

学僧 更に日章殿の功も認められて本能寺塔頭(たっちゅう)のご住職に引き上げていただければ、ますますの画期、お二人の大出世でございませぬ。

日章 いや、まだそうと決まったわけではないのじゃから、あまり騒ぐな。そうやって捕らぬ狸の皮算用をされると期待が高まり、ああ、わしまでがぬか喜びをしてしまうではないか。

学僧 いえいえ日章殿、狸は捕まえたも同然でございませよ、ご出世の内示に貫主様は本日わざわざおいでになるのでございませう？ 日章殿そろそろ本堂で控えて

おられた方がよろしいかと。(と、退場する)

日章 ああ、すぐ参る。(学僧がいなくなったのを確認して) 思えば十有余年、あつと言
う間の月日であった。このたび日逕殿のお引き立てで、任職までとはいかずとも
本能寺には入ることができそうじゃ、ああ今ようやくわしの前にも出世の道が開
けて来たようじゃ。ふふふふふふ、ははははは。(声を出さずに笑う)

日逕 (声のみ) 日章、日章おるか?

日章 え、日逕殿、貫主様のお声。

学僧 (入って来て) お早いお着きで、本堂でお待ちいただくように申し上げたのです
が。

日逕 (登場しながら) なあに構わぬ、わしもここで文庫番をしておったことがあるか
ら入って参った。

学僧が座布団を上座へ敷き、自分は隅に座す。

日章 わざわざおいいただき恐縮にございます。(と、手をつく)

日逕 文庫の中は実に懐かしい匂いがする、日本はおろか異国で作られた紙や墨の匂い
も混じっておるからな。

日章 はい。

日逕 經典の他にも様々な記録が何かの証のように残っておろう?

日章 何かの、証ですか?

日逕 どこかの土地でいずれかの時に記録されたものは、読みほどこいていくとそれはつ
まり土地の記憶と時の記憶が結びれていることに気がつく。

日章 土地の記憶と時の記憶……でございますか。

日逕 どうじゃ日章、文庫番として寺の財産や記録を保管する仕事はもう慣れたか?

日章 はい、ちょうど季節を一巡りいたしましたので、蔵書の手入れ、虫干しなどに
ついてはどうにか。

日逕 本能寺再建の折には日章はほんによう働いてくれた。途中関白殿の命令でところ
移りを余儀なくされたが、お蔭で無事再建もあいなり織田殿の供養塔も建てるこ
とができた。

日章 日逕殿わたしの働きなど微々たるものでございます。再建費用の大部分は日逕殿
に帰依された京都、堺の大手の旦那衆がお出しくださいましたものでございます。
仏縁で繋がれた有り難いお方ばかりじゃ。

日章 若輩者のこのわたしはようやく少しばかりの浄財を集めました。

日逕 何が少しばかりの浄財です、このたびのことはわし一人ではとうてい成し遂げる
ことはできませんかった。大手の旦那衆は屋久島の材をたいそう喜んでおられたぞ。

日章 ありがとうございます。

日 逕 「日章、そなたの働きで法華の教えと無縁だった辺境の村々にも「南無妙法蓮華經」の響きをもたらすことができたわけじゃ。しかしきつと辛いこともあったであらうな？」

日 章 石を投げられたり、棒で打たれたり、夜中に襲われたこともございました。

日 逕 法難に合われたわけじゃな。仏法を広める時に法難はつきもの、それが信仰を強くするという身ををもって経験したというわけじゃ。

日 章 はい、確かにその時わたしは法華經の中に出て来る『常不輕菩薩』の話しを思い出しました。わたしを襲う百姓、石を投げて来る相手に手を合わせ「私はあなたを敬い、決して軽んじるようなことをいたしません。あなたはきつと正しい修行をして仏様になるお方です」とただひたすらに言い続けました。

日 逕 ほう、それでどうした？

日 章 はい、ひよいと身をおかし、するりと逃げておりましたら、相手はますますむきになって棒を振りおろし、遠巻きに見ていた者達にも石を投げられ、この傷はその時のものでございます。(と、見せる)

日 逕 よい修行をしましたな。

日 章 はい、ありがたきことでございます。

学僧退場。

日 逕 で、これから後(のち)はいかがいたす？

日 章 はい、できることなら……。 (本能寺に入りたい、日逕殿から言ってくれ)

日 逕 島に帰るか？

日 章 え？ 島に帰れと、このまま屋久島に帰れと仰るのですか？

日 逕 何か不都合でもあるか？

日 章 え、いえ、しかし、その。

日 逕 既に經典は学んだはずだ、他の者が二年かかるところをお前は優秀な成績で一年で終え、そして修行、何よりも仏の道の道の実践を行ったではないか。

日 章 それは、そうなのでございます、が。

日 逕 それはそうなのでございます、が？

日 章 はい、この傷を受けたとき「私はあなたを敬い、決して軽んじるようなことをいたしません」と口では言いながら、振り下ろされた棒が当たらないように自分の身をおかすことばかりを考えておりました。お釈迦様や菩薩様の魂から出た言葉をわたしはただ真似て口にしたばかりでございました。これでは誰を救うこともできず、わたし自身も救われません。ですから更に本寺において修行をさせていただきます。ただきたくお願い申し上げます。

日 逕 日章、本寺に戻りたいというお前の申し立ては知っておる。

日章 はい。

日逕 本日こうして出向いて参ったのもそのことじゃ。

日章 はい。

日逕 お前が上洛して修行を始めて十年以上経つ。成績は優秀であるし、再建にも力を尽くしてくれた。わしはお前が本能寺の塔頭に入ってもおかしくないと思ってる。しかしそれは叶わぬことなのだ。

日章 叶わぬこと？

日逕 わしは己の無力を知らされた。

日章 貫主様が無力であるなど……。

日逕 わしは貫主になりはしたが、わしの出世を快く思わない者が未だに多数おつてな。何ゆえに？

日逕 あの時な、本能寺は織田殿から鉄砲と火薬の調達を命ぜられておつた。その上織田殿は寺との約束を破って上洛の際に本能寺を宿坊にした。そこを明智勢に襲われ寺も焼かれたわけだが、その時の災難が何故だか鉄砲や火薬を調達したわしのせいだと言う奴らがおつたわけじゃ。

日章 日逕殿はお召し上げに従つたまでのことでございます。

日逕 まあ、それは言いがかりのひとつだ。そしてもうひとつはな、お前にも関係のあることだ。

日章 わたしにも関係のあることですか？

日逕 人は皆同じように救われると喧伝（けんでん）している大乘仏門の中においてさえ、出自がものを言う。京や都の近くで生まれた者達は、わしらのように西国の果て辺境の島で生まれた人間よりも自分達の方が上等な人間だと思つておる。

日章 そんな、そんなこと、お釈迦様は「人は生まれによって尊いのではなく、行いによって尊い」のだと教えております。日蓮大聖人も貧しい漁村で生まれ育つたお方ではありませんか。

日逕 日蓮大聖人の六人の弟子がそれぞれの門閥をつくり、互いに離反しているだけでなく門閥の中にも争いや足の引つ張り合いがあるのが現実だ。だから日章、わしの方ではお前を引き上げて出世させてやるのが叶わぬのだ、まことにすまぬ。

日章 （と、手をつく）

日逕 殿、お手をお上げください。

日逕 しかしこのままではお前もわしも悔しいではないか……（独白のように）人の前に火を灯せば我が前明らかなるが如し。（間）どうだ日章もう一度野（や）に下り機会をうかがおうではないか。

間

日章 承知、仕り申した。

照明が絞られる

打楽器の音が静かに入って来る。

日逕 まことに済まぬ、わしの力が足りんで。

日章 わたしは大丈夫でございます。もうこのことで気に病むことはおやめ下さい。わたしは、大丈夫、ですから。(と、絞り出すように)

打楽器の音と日章の足拍子の緊張感。全暗転

第三場その老 尼崎柳酒屋隣

舞台明転。舞台上には二軒の店、上手側には柳酒屋の暖簾が下がっていて「あまざけあり」の旗。店先には縁台が置いてある。その隣下手側の店の前で学僧が掃き掃除をしてから看板(屋久杉のような立派な板)を出す。そこには「尼崎萬相談承所」と書いてある。

学僧

尼崎萬相談承所(あまがさきよろずそうだんうけたまわりしよ) さすがは日逕殿の書、みごとでございます。本能寺一番の大旦那柳酒屋さんのお店(たな)の隣に置くとますます映えますな。(とひとりごちてから客席に向かって)徳川殿の世になり、全国から特産物を積んだ大きな船は皆、堺に持つていかれ、ここ尼崎には小さな船が入って来るばかりになりましたが、いまだに大勢の人が集まって来るのは、逆に雑然とした町だからでございます。そうなると当然色んな問題、揉め事も起こる訳でございます。なにせ今の時代は「喧嘩禁止令」によってたとえ気に食わないからと言ってその場で斬り殺してはいけないということになっております。そこに目をつけた切れ者貫主日逕殿が、揉め事の相談に乗って字が書けない民衆に代わって訴状や起請文(きしようもん)を書いて差し上げようと考えたのがこの相談所であります。(間)本寺で出世を逃した日章殿へのせめてもの親心……の、筈ですが、このとおりに閑古鳥が鳴いております。この半年で来たお客様はたったの一人でございます。(間)わたくしが思いますには隣の甘酒屋が悪い。何か相談ごとがあつてこの暖簾をくぐろうかと迷つて、一度通り過ぎてまた戻り、を何度かやっているうちに人は「あまざけあり」に惹かれてあの暖簾

の中に吸い込まれて行くのでございます。そりゃ悩みを相談するよりも甘酒でも飲んで元気になれば悩みも吹き飛ぶということでございます。日章殿は今日も暇に任せて漢書を読みふけております。

学僧セリフの後「あまざけあり」の旗を「萬相談承所」の近くに持って来る。種子島家臣上妻重盛とその甥宗重が登場する。が相談所には入って来ない。

宗重 叔父上様このたびは本にご苦労さんでござり申した。昨日早舟を出して帰ることを伝えておきましたので、島では伯母上様と従妹たちもお待ちでございませう。

重盛 宗重それもそうじゃがわしは我が身の安心を得て、こうやってほうつと息をつくたびにあの方の顔が浮かぶ。

宗重 叔父上様、それはわたくしも同じでござり申す。

重盛 我が上妻家がずっと仕えて参った種子島家、久時殿のことだ。

宗重 はい。

日章文机の前から立ち上がり、二人の様子をうかがう。

重盛 島津義久殿が羽柴殿に下った時にも共に上洛し、降伏と忠義の意を示した。

宗重 それから朝鮮出兵の時だって、家中には反対する者もいたが自ら先頭に立って戦ったではないですか。この宗重もお供申し上げました。

重盛 それまで戦さとお家の騒動で疲れ果てた島津家にとってはありがたい働きだったはず。

宗重 いかにも。

日章 いかにも。(思わず)

重盛 ところが朝鮮から帰って来たらどうだ、久時殿は種子島に戻ることを許されず知覧に所替えになった。五年経ってようやく戻れることを許されたが領地は種子島だけになった。

宗重 鉄砲をつくる技も今では全国に広がってしまい、先代の時堯(ときたか)殿の先見の明もネジ作りの苦勞も何もかも蹴散らされてしまった。

重盛 ああ。

宗重 屋久島の山の木も口永良部島の硫黄も皆島津家に召し上げられてしまいました。

日章 いげんしたらよかとかい、いげんしたらよかとかい。(歩き回る)

重盛 お召し上げには迅速に対応し、できるなら先回りをするくらいでないと生き残る

ことができません……ということはおわかってはおるのだが。

日章 お召し上げには迅速に対応し、先回りをするくらいでないときき残れない！

宗重 叔父上様、種子島家は何かも奪われてしまうのでございませうか？

重盛 全ては島津殿の胸先三寸、弱ければすぐに潰される。しかし力を持ったら持ったでたたかれる。……更に忠義の意を尽くさねば。

日章 ごうらしか。

重盛 (声に少し反応して) ごうらしか。

宗重 本にごうらしかこつでござり申す。

日章が出て行こうとしたら隣の甘酒屋の旦那(柳酒屋)が現れる。
独り言のようであるが実は先の二人の会話を聞いていた。

学僧 あ、旦那様。

柳酒屋 先だって近くのこんこんさんにお参りに行きましたのや。ここいらへんの商いの神さんは皆伏見稲荷の流れこんこんさんですねん。おキツネさんが稲荷神のおつかいや言うからこんこんさんって呼んでますのんや。おキツネさんが油揚げが好物やって誰かから聞いたもんで家のものに油揚げをたいたんをこさえさせてお供えしようと思っていったんですわ。そしたらお侍はん(重盛に)何が起きたと思わはります？

重盛 (突然の問いかけに驚いて) え？

柳酒屋 わてが油揚げを懐から出したら、どこからそれを見てはったんか知りまへんけど突然大きな鳥が空からびゅーっと唸り立ててその油揚げを掴んで行ってしまいましたのや。わてはもう吃驚して腰が抜けそうになりましたわ。お侍はんそうでっしゃろ？

重盛 確かにびつくらこくわなあ。腰が抜けそうになるのも無理はなからう。

柳酒屋 そういうことですねん、お侍はん。

宗重 そういうこととは何のことでござりませう？

柳酒屋 とんびの油揚げのかっさらいは世のならい、ということですよ。

宗重 かっさらい？

柳酒屋 お宝は狙われる、逆に価値のない物は狙われしまへん。つまりはかっさらわれた物は価値のあるお宝だ、ということですよな。

重盛 お上によるお召し上げを、かっさらいななどと、強欲な商売人のこつある。

柳酒屋 お召し上げもかっさらいも有無を言わせないということでは同じもんでっしゃろ。わてら商売人は、こつちの特産物が欲しいと思ったらきっちり銭を払います。そしてあっちの村で売って儲けさせてもろた分は、困っているお方や神さん仏さん

に寄進させてもろうてますさかいにな。お侍はん、世の中の動きはとんびのように早い、あちこちの動きをしつかりと見て油断のなきようせねば足をすくわれてしまいますよってにな。

重盛 世の中の動きはとんびのごつ早い、あちこちの動きをしつかりと見て油断のなきようせねばならぬか……なあ、あんたの話しばもうちつと聞かせてくれんかね。

宗重 叔父上様、われわれは武士ですぞ、町人のいうことなぞ……。

重盛 お家を守り領民を守るためじゃ、いいではないか。

柳酒屋 まあ甘酒でも飲んで、中でゆつくりと休んでいってください。

上妻の二人は柳酒屋に誘導されて店の中に入る。その際柳酒屋の旦那は「あまぎけあり☑」の旗の位置をなおして行く。日章と学僧が出て来る。

学僧 (柳酒屋の行動に) ばれた、か。

日章 柳酒屋の旦那様はなしてあんなにうまく人を引き込むことができるのじゃるか？

学僧 日章殿そのことにつきまして、わたくしはかねがね思っていることがございます。

日章 うん、何じゃ？

学僧 ひとつ、看板が良くない。

日章 あれはふるさと屋久島から送ってきた優良なる材であるぞ。

学僧 そうではなくて、字が書けない人の為に訴状を書いてやるというけれど、字が書けない人がこの看板の字が読めますか？

日章 しかしあれは日逕殿が書いてくださったものじゃ、書き直すわけにはいかんじゃろ？

学僧 ふたつ、日章殿も隣の柳酒屋の旦那様を見習って外に出て声をかけたらどうですか？

日章 なるほど、それもそうじゃ。いいところに気づいたな。

学僧 それなら早速やってみましょう。

二人の百姓が登場する。それを見つけた日章と学僧が手ぐすね引いて待っている。

百姓1 なあホントにここいらあたりだがや？

百姓2 まちがいねえ、確かにこのあたりだ。

百姓1 ホントにおらだずの話しっこ聞いてけんだがや？

百姓2 もうここまで来たんだがら後さは引けね、とにかくどうにでもして聞いてもらおう
しかねえべ。

百姓1 ああ。

学僧 また隣の客ですかね。

日章 いやわからん、しかし何か切羽詰まった様子、きつと相談事に違いない。(と百姓
のそばへ行く)

百姓2 こんにちは。(と、日章と学僧に向かって礼をする)

日章 こんにちは。(と、同じようにお辞儀をしてから一気にしゃべり出す) 泥の中でも
美しく咲く白い蓮の花のような正しい教え「妙法蓮華経」を学べば、どのような
悩み迷い困りごとでも解決することができます。このわたくしが水先案内人とな
りますので「法華経」という大船に乗り人生の荒波を共にかき分けていきましょ
う。

百姓2 ああ、それはそれはご親切にありがとうございますごぜえます。

百姓1 それではちよっくらお尋ね申します。

日章 はい、どのようなことでもご相談ください。

百姓1 こちらあたりに柳酒屋さんがあると聞いてきたんだげど。

学僧 (がっくりと肩を落として) ああ、今度は最初っから隣の客だ。

と、言いながら隣の暖簾の中に入って行く。

日章 どこか東国の方でございますか？

百姓1 へい、おらだずは陸奥国(むつのくに)北上の百姓でござえます。

日章 そんな遠いところからわざわざ柳酒屋さんに会いに来られたのですか？

百姓2 へい、おらだず二人は村の総代として船を乗り継ぎ山を走ってようやくここにま
で来たんだげど。

学僧が戻って来る。

学僧 旦那さんは用事が済んだら出てこられると……。 (その後何か作業をしながら様子
を見ている)

日章 ではしばらくここでお待ちになれば良い。

百姓1 いやあ、申し訳ねえ。んじゃちよこつとここにやらせでもらうべ。

百姓2 世話になります。(と、二人は隅に行って小さく座る)

日章 道中は難儀ではなかったですか？

百姓2 へい難儀なことは何もなかったげど、今あちこちで人がわさわさど動いている
ごどにびっくりたまげだっちゃ、な。(百姓1に)

百姓1 ここまでくる道々でも大勢の百姓の姿を見だのっしや。一度は食えなくなつて村を出て行った百姓だづが徳川殿の最後の戦が終わつたらまだ生まれだ村さ戻るちゆうごどだ。んだがら、これがらのあだらしい世の中にうまぐ乗つていくためには村の者だちが心をひとつにして知恵を働かせでいがねげればなんねえわけだっしや。そのためにおらだづはこうやつて出がげで来たわけだっしや。

日章 そういうことを、柳酒屋さんに相談したいということ、ですか？

百姓2 柳酒屋さんは、おらだづが作った米を、どことなく米（まい）でも買ってける旦那さんなんだっちや。つまりおらだづを大事にしてけるお人だからきつとわがつてくれんでねえべがつて。なあ。（と百姓1に）

百姓1 んだ、んだ。

柳酒屋 （入つて来ながら）お待たせしてすまへん。どちらはんがわてにご用どっしやろか？

百姓2 旦那様、柳酒屋の旦那様でござえますか？

柳酒屋 ええ、わてが柳酒屋どす。

百姓2 おらだづは陸奥の国北上の大崎村と葛西村の総代でござえます。

柳酒屋 それはまた遠いところから、わざわざおいでいただいたのはどのような用向きでございましょう？

二人の百姓は突然土下座をする。

百姓2 へい、旦那様におらだづの一揆に加勢してもらいでくて……。

日章 一揆に？

学僧 一揆に？

柳酒屋 わてが百姓一揆に加勢ですか？

百姓1 へい。

百姓2 へい。

柳酒屋 それはどういったことございましょう？

★一揆の歌（百姓1・2が歌つて踊る。途中から学僧、上妻2名も加わる）

♪横一文字のひとつとせ ひとつどころに命がけ

♪この地で生まれて米づくり 一所懸命ひとつとせ

（天の災い 冷害 洪水 旱魃 地震）

♪力を合わせて、イエイ、乗り切ろう

（人の災い 成敗 強奪 戦争 差別）

♪知恵と勇気で、立ち向おう

♪横一文字のひとつとせ　ひとつところに名をかけて

♪この地で生まれた百姓が　起請血判ひとつとせ

(天の災い　冷害　洪水　旱魃　地震)

♪力を合わせて、乗り切ろう

(人の災い　成敗　強奪　戦争　差別)

♪知恵と勇気で、立ち向おう

♪こころひとつに結ぼう(一揆)

♪喧嘩はやめて(一揆)　知恵と勇気で、立ち向おう

百姓1　おらだずの村の領主様は二人とも小田原征伐に出なかつたことで仕置きをさ
れでいねぐなつたのっしや、昔から二つの村は水のことと争つて来たげつども、
これからはひとつの村になるわけだから、もう喧嘩なんかしねで皆で心をひとつ
にして知恵を働かせる約束つまり一揆を結ぶべつて。なあ。(と、百姓2に)

百姓2　柳酒屋の旦那様、おらだづは本当は領主様ど一揆を結びでのっしや。んだげつど
も新しく来た伊達のお殿様も今はそれどころではねえみで、目はおらだづの方
ではなく別な方をむいでんのっしや。だからつて何もしねでいだらおらだづの村
が誰かの都合の良いようにされでしまうかも知れね。

百姓1　一揆は横にばかり広げでいつてもだめなんだっしや。手ぬぐいみでに風が吹いだ
ら飛ばされでしまふ。

百姓2　そこで、こうやつて米を買つてもらつてる商人の旦那様にお願ひに上がったつて
寸法でござえます。

百姓1　田植えの時には水がトクトクと流れで、稲を刈るまではどうか川の水を暴れさ
せねように、そして安定して米を作れるように知恵を貸して貰えねべが、人足は
二つの村総出で働きますから、何卒お頼み申します。

二人の百姓が頭を下げる。間

柳酒屋　ようわかりました。早速治水工事の職人衆を手配して村に行かせます。いつも水
が足りんようになるのはどこの田んぼか、どの川が暴れ川なのか職人衆に教えて
やつてください。

百姓2　ああ、ありがとうございます。

百姓1　旦那様……この御恩はきつとお返しします。

柳酒屋　当面の銭はわてが持ちますさかいにな。あんたらは心配せんでどうぞ米を作つて

ください。

百姓2 ありがとうございます。ほんとにありがとうございます。

柳酒屋に促されて二人の百姓も甘酒屋に入って行く。それを見送る

日章と学僧。

学僧 噂には聞いていたが東国の百姓の、切羽詰まった中でもヤケにならずに、折り曲

げた腰をバネにして繰り出される言葉……はあ、衝撃だ。(と、先の踊りを再現)

日章 柳酒屋さんのような人助けは、われら僧ではできないこと。やはり銭の力が必要なのであろうか。(と、踊りを真似る)

学僧と日章が相談所の中に入って行く。舞台暗転。

第三場その式・屋久島粟穂村

舞台明転。下手から日流登場。亀女を呼ばれる。

日流 亀女さんよ、えらいことになった。村の衆が騒ぎでした。

亀女 騒ぎ出した？

日流 都に出たきり何十年も島に帰って来ん男に、なして気ば遣わんとならんのだ、
って。

亀女 日章のことか？

日流 ああ、おい達が難儀して山から出した木をなんぼで売ってるかわからんが、こっ
ちに来るのは米二俵ばっかし、日章が一人で儲けておるんじやると村の衆が……。

亀女 日章が一人儲けておるなんて、そげなことあるわけなかる。

定次 わしもそう言ったんだが、こないだ麦生に来た商人の船は倍の量の米を置いて行
った、それにこれからも伐ったら伐っただけ買い上げてくれると。

亀女 役人の目をかすめて、そげなこつ……ばれたら打ち殺さるっど。

日流 だがな、皆で分けたらほんのちよびつとしかない米のために、山に入って難儀す
るのもあほらしか。堺の商人に直接売る方がまだ、と皆が騒いでおる。

亀女 高く買ってもらえるところに物を売るのは当たり前のことってか！

日流 隣村の衆がどんどん木を伐りよったら、おいたちの山の木まで伐られてしまう、
先に伐らな損じやと喧嘩腰じゃ。

亀女 そげな了見で山さめ入ったらろくなことにはならんぞ。山ん神が腹かくがよ。

村人 山ん神が腹かく？ それよりも米ん飯が食えるかどうかや、爺と婆と 子どもん衆
に米ん飯を食わせてやるためじゃったら山ん神も許してくれようが。

不気味な地鳴りのような音。セリフと共に登場。

いね なんじゃ、山が鳴りよった。みんな起きろ何かが来るぞ！！

日流 みんな起きろ。山の上さめ逃げろ！！

たき 海が来た。冷か夜、冷たか体に海が、海が来た。

日流 (あちこちに) みんな起きろ。山の上さめ逃げろ！！

みつ 何が何だか、何が起きたのか、夢なのか幻なのか。

とよ 水が突然やってきて体が浮かんだと思ったら強い力で引っ張られた。

女達 何が何だか、何が起きたのか、夢なのか幻なのか。

とよ 隣に寝ていた赤子を抱き、夢中で裏山に上った。

舞台に照明が入る。

とよ (はっとして) おいの赤ん坊、おいの赤ん坊、どこさめ行った？ (と立ち上がる)

うとするが立ち上がれない)

いね (押しとどめて) 戻ったらお前も波に持って行かれるが。

とよ おいの赤ん坊は生きているのか？

女達 (互いに顔を見合わせる) ……。

とよ おいの赤ん坊はこのまま死んでしまうのか？

女達 (首を横に振る) ……。

たき 今はここでこらえろ。(と、抱きしめてとどめる)

日流 どうかどうか鎮まれ、このまま静かになつてくれ！

みつ 竜神様が怒ったんじゃ。

日流 竜神様が怒った？

みつ 竜神様が怒って大波をおこしたんじゃ。竜神様を怒らせたのは誰じゃ？！ (と、

繰り返しながらあちこちを指さす)

下手に日章。

日章 この大波は陸奥の国から安房国(あわのくに) 日向から奄美まで、海辺の村々を襲った。ふるさと屋久島の村も……。 (間) その前には(不安を打ち消すかのよう)に記録を読み上げる) 文禄五年四月浅間山大噴火、六月東国において洪水、被害甚大なり。閏七月九日伊予国をおそった地震により寺社多数倒壊。三日後起きた大地震では豊後国で死者七百人以上、京では東寺・天龍寺・二尊院・大覚寺が倒

壊し、大坂・堺・兵庫においては家々の倒壊多数なり。更に翌日子の刻京都・伏見で大地震起こる。完成間近だった伏見城天守もこの地震により倒壊。城内ではおよそ六百人が圧死し死者は全部で一千人を超えた。……記録をしてその記録を読み上げて、一体わたしはどこで何をしているのだ。(客席に向かつて)地震や津波のような天災という現実の前では何もかもが無力だ。人間同士が争っている場合ではなからう、足の引っ張り合いをする門閥の中にいてわたしは一体ここで何をしようとしているのだ？

(男声ソロ・ご詠歌?)

荒き御魂をば鎮めよ

緋(アケ)の纏(カズラ)を 額(ヌカ)につけ

赤き幡鉾(ハタホコ)を かかげ

地の神 水の神 海の神 怒りおさめよ 魂鎮めよ

和御霊(ににぎのみたま) のなすままに

和御霊(ににぎのみたま) のなすままに

はるが赤ん坊を抱いて上手側へ置いて行く。その刹那赤ん坊の泣き声。全員そちらを見て立ち上がるところで暗転。全員退場。上手の学僧にサスが当たって独白。

学僧

日章殿は行ってしまわれました。齢四十を前にして、新たな学問、あの「師、のたまはく」の儒学の一派朱子学を学ぶそうです。その教えは、例えば何か起きた時、人は善か悪かという二つにひとつの考え方をしがちですが、朱子学では、その解釈は少なくとも六十四通りあるということです。物事は季節の様に変化するのが当たり前、陰と陽は相反するものではなく互いを互いの中に含んでいるという思想だと聞きました。地震や津波が起きるのも自然の理(じねん)のことわり)であり、その時人間ができることは何か、行動規範、特に王がすべきことが書かれている王法であると、日章殿は申しておられました。この朱子学、今江戸では大流行りでございます。しかし日章殿は江戸へ出たのではなく、生まれ故郷の近く薩摩の禅寺に入られました。日章殿は日章殿のことを儒教かぶれだと言いながらどこか哀しげでおられました。日章殿は儒家名を竹の如しと書いて如竹と名乗っておられるそうです。

その後日流、いね、たき、亀女が三方から登場し、中央にサス。

日流

日章からの手紙じゃ。

いね また材を送ってくれと言われてもやっせんぞ。

亀女 近頃はずいぶんと島津の家来が目を光らせているからな。

たき あの大波の後、流された家や船を作り直すための材を伐ることは一時認められたが、またいけんようになった。

亀女 こないだも麦生村の衆が捕えられておもっさめ打たれたと聞いたぞ。

日流 いやまてよ、日章はな、寺を出たと書いてある。

亀女 寺を出た？

たき 寺を出てようやくこん島に帰って来るって？

日流 いや、そうではなか、ただ何があったのかはわからんが法華僧をしばらく名乗らぬと言って来た。

いね おい、おい、おい、ちよつと待てや。おい達は今まで、日章さんの出世の為に材を送って来たんじやぞ。散々ばらおい達をつかちよつて、そいが今になって…：なして出世しとらんのにその寺を出るって。おかしか話じや！

日流 南浦文之和尚の元で朱子学を学ぶと書いてある。

亀女 文之和尚？

日流 島津殿のな、外交文書を一手に引き受けて、明や琉球との貿易に関わっていると
言われているあの南浦文之だ。

たき と、いうことは日章さんは坊主をやめて今度は侍か商人にでもなるつもりなのか？

日流 法華宗や種子島家との繋がりよりも学者となり島津家と繋がった方がやりやすい
ということのようじや。

亀女 島津家の家来になって日章は何をしようと考えておるんじやるか？

たき あのを、これからは伐った木をば、島津の殿様がちゃんと銭で買ってくれるっち
ゆうことやなかるうか？

いね うんにや、逆やど。我が領地に銭なんぞ払ってくれるもんか、ますます独り占め
するに決まってる。おい達が関所をつくって銭ば取ろうとした時にも、この島の
山と木は全部島津家の物だからお前らがそげなことはできんて言うておったやろ。
すぐそこにある山がここに住んでいる衆のものではないなんて…：どうなってお
るんじやろ、こん世の中は。

亀女 ごうらしかことじやが、島の衆の考えどおりにはならん。

日流 (独り言) 如竹？

たき なあ、この村のことを日章さんに手紙で知らせたらいけんじやるか？ 何か名案
があるかも知れんぞ、な。

日流 日章ではない、如竹だと。何が竹の如しの如竹じや。

いね 字が書けるのは和尚さんだけじや、な、和尚さん日章さんに手紙を出していけん
したら良かかって聞いてくれんか？

日流 ……。
いね 和尚さん？
日流 ……。

サスが消え、皆退場する。

第四場 再び尼崎柳酒屋

するどい竹音ひとつ。旅装束で客席から現れた日章にサス。

日章 二十年、この地を訪れるのは実に二十年ぶりだ。薩摩の文之和尚の元で朱子学を学び、その後縁あって彼の藤堂家……主人を七度変えて戦国の世を乗り切ったと言われている高虎殿の江戸屋敷に仕えた。二十年の間に、世の中は随分と変わった。血を流す戦が終わりに、徳川幕府の新しい体制の中でお家存続その上に有利な地位を占めるためのせめぎ合いが続いた。どこの大名家も働き場をなくした侍達を養っていくには何が必要か、先見の明を持った領主はさむらい達の精神的支柱を学問にもとめた。藤堂家もそうであったが高虎殿亡きあとはもはや学問は求められなくなった。(アオスジアゲハが一羽現れる、少しの間その動きを目で追って) 何だろ。心の中にぼっかりと穴があいたような……この気持ちは……まるで戦の場をなくしたさむらいのように……きりきりと、寂しい。

舞台全体に照明。柳酒屋の暖簾。『あまざけあり』の小旗も以前のまま。その店先に柳酒屋が立っている。

柳酒屋 日章はん、いや今となっては有名な朱子学者泊如竹殿、長の旅お疲れさんでしたな。

如竹 柳酒屋の旦那様、わざわざ店先でお出迎えいただき恐れ入り申す。

柳酒屋 (如竹が隣を見たので) ええ、今では隣も甘酒屋のお店(たな)にしていますのんや。

如竹 ご繁盛のようで何よりでございます。

二人は暖簾をくぐって店の中へ入る。歩きまわるうちに店先のセツトが片づけられて、座敷のような場所になる。向き合って座る二人。

柳酒屋 如竹はん、大体の話は手紙で承知しております。

如竹 はい。

柳酒屋 その上で言わせてもらうんやけどな。

如竹 はい。

柳酒屋 文之和尚はん、玄樹和尚はんら、お師匠さん方の仕事を残したいというだけのことならば、本の出版なぞせんでもよろしいのと違いますか、やめときなはれ。

如竹 何ゆえにそう仰られますか？

柳酒屋 なにせ出版には銭がかかります、職人を集めて、それも経を専門に彫っている職人でなければ唐文字は彫れませんよってにな。それと出版したら、その金を回収するために売らなあきまへんねんで。そのあてはありますのんか？

如竹 出版にかかる銭はなんとか用意できます。

柳酒屋 そうですか、ただ、今の世の中、儒学といえど江戸。その江戸幕府を後ろ盾にした林羅山先生一門が幅を利かしてるさかい、入り込む隙はないのんと違いますか？

如竹 わたしは薩摩の文之和尚よりこの学問を学びましてございます。ですから尚更に江戸や京都だけではなく辺境の地にいる地侍や領主、いえ百姓の惣代、学問や王法とは無縁で生きてきた民衆にまで朱熹の教えを広げることができればと思うよりも。学問は一握りの力のあるお方だけのものではございません。

柳酒屋 せやけど賢くて弁が立つ百姓や下級武士が増えるということは、王にしてみたら領民を支配しづらくはなりやしまへんやろか？

如竹 旦那様、王法とは領民を治める為の法ではなく王が守るべき法にございます。

柳酒屋 王法とは王が守るべき法？ (間) ははははは、氣に入りました。

如竹 どんな辺境の小さな国、村、家においても身を修め慎み深い王がいて、賢い民衆がいるならば、天下は泰平になるといふことでございます。

柳酒屋 せやけど、字も読めない民衆にどうやってその学問を教えていかはるつもりですか？

如竹 語り歩こうと思っております。わたしが子どもの頃和尚様の話しを聞いて、面白いと思ったように、興味を持った時に本があれば……。

柳酒屋 また難儀なことを、今から始めるわけですか？

如竹 その本を持って、まずは西国の大名家の若侍達に広めたいと思っております。

柳酒屋 とはは言うものの、本能寺の日蓮殿とは問題はあらしまへんのか？

如竹 儒学自体が仏教を否定しておりますゆえ、寺の後ろ盾を得ることはできませんでしたが、わたくし自身は日蓮大聖人が仰った現世に仏国土をつくるためのひとつの試みであると考えております。

柳酒屋 如竹はんが言わはるるように学問の力で天下を平らかにすることができたらよろしいな。

如竹 はい。

柳酒屋 わかりました。京都で出版を手掛けている中野屋はんを紹介しまひよ。

如竹 ありがたきことでございます。

柳酒屋 なるほど、益々如竹という名前のとおりですわな。

如竹 はい？

柳酒屋 強い風に吹かれてもしなつて折れず、地面の下でいつの間にか根を広げ、どこまでも増えていく竹林のようだな。その根っこは琉球までも広げていくつもりでっしやるか？

如竹 琉球？

柳酒屋 島津殿は琉球を武力でもつて制圧しましたが、この後は内側からの支配を考えておられる筈です。

如竹 内側からの支配？

柳酒屋 日本との繋がりがよりも大陸との繋がりが強い琉球を、これから支配下に置こうと思つたら、大和の言葉と意味を持ちこむことが重要になってきますやろ？

如竹 はあつ。(と頭を下げる)

暗転。日流と亀女、女1が上手から登場。

日流 日章からの手紙じゃ。本佛寺と村の衆に宛ててある。

亀女 で、何と書いてある？

日流 (書状を読み上げる) 勤めは無事、金もどうにか足りています。……船のことは解決しましたか？ もしまだ解決しないのであれば役人に相談をし、その後、皆で談合をして近いうちに一人寄りしてください。

亀女 今、日章はどこにおるつてや？

日流 (聞こえなかったらしい) 人を寄こしてくれ(独白) ……その船に何を積んで来いと言つておるんじやろか？

亀女 (大声で) その手紙はどこから来た、なあ今、日章はどこにおるのじや？

日流 琉球におるんじやて。

亀女 琉球？ 琉球で何をしておるんじや？

いね (書状を取り上げたどどしいながらも読む) わざわざ一筆申すべくさうろつ各々の身持ち……

如竹 (声) 各人の身持ちが気がかりなので敢えて一筆申し上げ候、村のための働きは何事でもひたすらにすること。親への孝行は立派な衣装やうまい食べ物差し上げることではなく親が心穏やかに暮らせるように気を配ることである。人を悪く思えばその罰があたるが、人によかれと思えばその徳にてわが身もよくなる。大酒を飲み昼寝をすることを仕事と心得てはならない。一日のはかりごとは宵の内に行い、一年のはかりごとは春に決め種をまきなさい。

いね 右の条々よくよく心がけ候こともつばらに候。琉球からわざわざ手紙を寄こして

説教くさいこっちゃ。
亀女 米をつくる百姓のごと暮らせと言うちよるようや。

暗転。テーマ音楽。

第五場・奥岳で一七日（ひとなぬか）

粟穂村の女達（第一場の女達の孫）トビウオ招きの格好で上手から登場。

トヨ 最近トビウオを呼んでもなかなか寄って来やせん。
タキ 潮が変わったかも知れんって父ちゃんが言うとった。
トヨ そしたらもつと大声で呼べばいいのか？（大声で）トビウオ来い来い、トビウオ来い。

タキ もう、魂がったがよ。

ミツ （遅れて登場して）おい、本佛寺の和尚様が山に籠るらしいぞ。

トヨ 年寄り和尚様がか？

タキ おいのばあちゃんがまだ娘の頃に、都に出たきり何十年も帰ってこなかったあの年寄り和尚様がなして今頃山さめ籠る？

ミツ 山の神さあに木を伐る許しをもらいに行くんじやて。

トヨ 木を伐る許し？

タキ 山の木を伐ったら山ん神さあが怒るのか？

ミツ そうじゃ神さあを怒らせたら、山鳴りが起きたり大風が吹いたり大津波が来るって言うもつとたぞ。

タキ そうしたらなして木を伐るんじや。伐らずにおけば山の神さあも怒らんで済むとやろ？

ミツ 年貢を納めるためじゃって。

トヨ 年貢を納める？ 誰に、何の為に？

タキ （同時に）年貢を納める？ 誰に、何の為に？

如竹がブルホリの中に浮かぶ。それに気が付いた三人。

女達 あ、和尚様だ。（口々に）和尚様生きて帰って来いよ。寂しゅうなったら昔のこ
とを思い出せよ。

ここからは時空を超えた幻想世界になる。紗幕とライトを使って異空間をつくる。如竹が晩年山の神に屋久杉伐採の許しを請うために山籠もりした時に現れた光景と考えてもいい。漢詩『春望』を口ずさみながら山を登ってくる如竹。背負子には斧と釣竿・食糧が入っている。大岩（実は木の切り株）の前に到着したようだ。

如竹

国破れて山河あり 城春にして草木深し（繰り返すうちに声が大きくなる）誰に聞かせるでもなく、誰に聞かれるでもなく大声を出すのはまっこと気持ちの良かことじゃ。（立ち止まって肩で息をついて）「屋久島に法華宗を広められた日増上人はご自分で一七日（ひとなぬか）山に籠って山鳴りをお鎮めになりました。このたび山の神を説き伏せることができるのは、長年修行を積んでこられた日章殿しかおられません」などと、生意気な小僧上がりが二百年前の話しを持ち出して調子のいいことを！ この年寄りにこげなしんどうか思いをさせよって！ おっと、大声を出す人も気持ちの良かことじゃが、こうやって飾らぬ言葉で物を言ううちゅうのもまたせいせいするもんじゃな。そうじゃ、わしは今まで法華経の中の言葉や朱子学の言葉を人に伝えることばかりを考えて自分の気持ちで自分の気持ちを語ることをしてこんかった。そげなことをしてはいかんといつの頃からか自分に禁じておった。

間

（物陰に誰かの気配を感じその人物に向けて）人は長くてもせいぜい五十歳までしか生きられないっちゅうのに、おいは七十歳じゃぞ。それをこげな山に登らせてほんのこて。（と辺りを見回し）なにが「ご住職はこの島の水先案内人」だ。「その頑強なお体は厳しい修行の賜物」だ。心の底では「途中で法華宗から離れた者がなして今更戻ってきたのか」と思っておることくらいおいは知っちゃよっど。（いきなり口調がやさしくなり）とはいうもののやはり心配ですっつついて来たのじやろな？ やさしか小僧じゃ。（気配のある方へ向かって）おい、こっちさめ出て来い。

しかし何の反応もないので、突然叫ぶ。

如竹

（大きく息を吸って、気配の方を一旦見やり）バカたろが！ おいは七十歳やぞ、疲れて病気になるがよ！ 本当に山ん神が目の前に現れたらびっくり魂がって死ぬぞ！ それでも良かとか？ 水先案内人がなんぼのものじゃ。一体全

体何なんじゃ！

突然胸を押さえて倒れる。そして気配の方を再び何うが誰もいなので仕方なく起き上がる。

如竹

まあ、確かに小僧が言うようにおいの体は丈夫にできておる。この先もおいは一体いつまで生きるのか、このまま死なぬのではないかと、たまに心配になることがある。おいがこのまま山中で死んだとしてもそれはそれで美談として語り継がれるわけやな。「貧しい村人が年貢を納めるために木を伐りたい、しかし山の神が怖いので寺の坊様が山の神に許しを乞うために山に籠り自らの命を捨てて許しを得た」とかな。何が貧しい村人じゃ、おいよりも米を食っちゃろうが、魚（いお）も食うし、鹿肉も食うておろうが。（と言いながら川の水をすくって飲み）ああ、うんまか。このうんまか水さえあれば人はどうにでも生きていけるがよ。

それから釣糸を垂れる。

如竹

子曰（しのたまわ）く、吾十有五にして学に志す、三十にして立つ、四十にして惑わず、五十にして天命を知る、六十にして耳順（みみしたが）う、七十にして心の欲する所に従えども、矩（のり）を踰（こ）えず、か。四十を前にして本能寺を出たわしは齢四十にして「より惑う」じゃったな。五十にして、天命を知る……か？

宗重

（突然現れ）如竹殿は大きな働きをしてくれ申した。四冊もの本を出版し、その中に「鉄砲記」も、「鉄砲記」は種子島家手柄の記録でござり申すが、いつなんどき又トンビにかっさらわれないとも限りません。しかしこうして版を作り何百部も印刷しておけば一冊がかっさらわれても二冊が焼かれたとしても、鉄砲づくりの技術が盗まれても、ネジを作った時の苦労が忘れられても、種子島家の記録として子々孫々残って行くに違いありません。土地の記憶と時の記憶が結ばれて文字の記録で無事ほどかれ申した。ご当主、時堯（ときたか）殿・久時殿そして我が叔父上上妻重盛（こうづましげもり）も草葉の蔭でうれし涙を流しておられます。（突然去る）

如竹

（？）となつてから）あの頃は、何か形に残さねばと焦っておった。自分の言葉で語ることができなかったから……他人の言葉を借りた、のだな。

柳酒屋

（すつと現れて）「鉄砲」は種子島殿の手柄、「鉄砲記」は文之和尚はんの手柄、そしてそれを出版したのは如竹はんの手柄でんな。なんでも中野屋はんは第二版に跋文（ぼつぶん）も書かせてもろた言うてました。そして如竹はんが出版した本は江戸の町でも朱子学の教科書として人気だったそうですね。本に大きな仕事

をされました。文字でほどかれた記録が今度は物語になって次の時代に広がっていかはるんですな。(間) そうや如竹はんは本を出版した後、琉球に行かほったみたいやけど、それでも手柄を立てることができましたやろか？

柳酒屋はすつと去る。

如竹

ああ、疲れとるようじゃ、種子島家臣上妻殿、柳酒屋さんの声が聞こえたような気がした。琉球で手柄？ 琉球には既に朱子学の本はあった。それを大和の言葉になおして伝えはしたが、言葉というものは土地の記憶と時の記憶が絡みついている。琉球には琉球の言葉があり、その意味の中で生きている人々に大和の意味を受け入れてもらうのは実に難儀なことだ。琉球は明を中心とした世界の辺境、屋久島は大和の国の辺境。この立場がひっくり返っていたかも知れんのだ。(間) ん？ さつきまでわしは何を考えておったっけかな……ああそうじゃ五十の天命、天命な。(と思いだしている様子) 六十にして耳順(みみしたが)う。確かに考えてみたら若い時というのは人の話を素直に聞けないもんじゃ。おいが本能寺を出た時日逕殿はいくつ位やったろうな。今となってはあの時出世できなかったからこそわしは朱子学を知ることができたわけだ。それはそれでたまたまのご縁、良かご縁じゃった。

学僧がぼんと現れる。

学僧

(ラップ調で) たまたま、たまたま、たまたま、たまたま (たまの鳴き声)
あなたには たまたまの 出会い でも わたしのころは だまだまよ
たまたま、たまたま、たまたま (たまの鳴き声)

と、竿を片づける際に、斧を出して側に置く。

如竹

ああ年貢じゃ年貢、年貢のことじゃった。検地と人別帳がきっちり作られた途端に年貢をちゃんと納めないかんようになった。それで村の衆は今更大慌てじゃ。(だんだん語調を強めて) じゃからおいは琉球から手紙を出して言ったらうが、これからの時代は自分達が計画を立てて勤め第一にと頭を切り替えないかんて。そいを今まで何しておったんじゃ。年貢なぞ払いたくないなんてことはもう通用せんのだ。そして何よりも困ったことがその年貢の取りまとめを寺にやれと言ってきた。誰かが年貢が払い切れない言ったら寺のもんが催促をしたり、取り立てをしたりせないかんてことじゃ。こいが一番難儀なことじゃ。七十にして心の欲する所に従えども、矩(のり)を踰(こ)えず……。大きく息を吸って叫ぶ)

まっこてほんのこて何なんじゃ〜！ おお気持ち良か。

百姓達、突然現れる。

百姓1 柳酒屋の旦那様はなしておらだづの一揆に加勢してけだど思う？

百姓2 そいつは村の皆が、ひとつどころに命をかけてまめに働いているがらだつて言つてだべや。

百姓1 ひとつどころに命を懸けでつてが？

百姓2 おらだづが米をこさえて年貢を出してこそ、この国はやって行けるわけだがら…
…当たり前のことだげつどもな。

如竹のすぐそばに寄つて来て

百姓1 あのお、おらの考えを語つてもいいべが？

如竹 (思わず頷く) ……。

百姓2 おらだづは年貢つちゆうものは一揆を結ぶ起請文と同じだど思うのっしや。領主様に年貢を納めるつちゆうごとは領主様ど心を一つにしていぐごだど……な
あ？ (と、百姓2に)

百姓2 なんだ、その通りだ。起請文に名前を書いたらもう裏切りは許されねえ。そ
いづは百姓も領主様も同じだ。

百姓1 一揆つちゆうもんは、心を合わせてやつて行くべつて約束をするごどだがらな。

百姓達そのまま去る。去り際に足元にあつた斧を木にたてかける。

如竹 いかん幻まで見えてしまった。(と、体操のようなことを始める。その後斧を手に取り) 根回りが大岩の様なこの木をどうやつて伐つて、運んだのやろか。(と斧で伐る振りをするが打ち下ろすことができない)

日流 (すつと現れて) 島津の樵達は大人数で足場を組んで……だから、村の者皆で力を合わせればできないことはなか。じゃつど杉は谷や斜面に生えちよつて伐る時はかなり危なかる。運ぶとなると尚更じゃ、そのことは知つちよつたか？

亀女 (すつと現れて) あのな日章、木は種を蒔いて一年で収穫できる米とは違うんじやぞ、確かにこん島には太か杉が数えきれん程ある。じゃつど毎年年貢で出すとなると危な場所の木までも伐ることになつてしまわんじやろか？ そうなるといつかはケガ人も死人もでる。おいはそいが心配や。

如竹 難義なことじゃ。(と、考える)

アオスジアゲハが飛ぶ。それを目で追う日章は何かを思い出したようだ。すると突然木の中からはるが現れる。その瞬間立てかけた斧が倒れる。

如竹 はっ。(と片腕を上げる…今に伝わる如竹踊りの振り) そうじゃ、何もかも伐って

いいのではなく伐ってはならぬ木もある、と言えがいいのだ。

はる ♪はるの宵は あなたに抱かれ 夢見ごこちの ゆらゆらゆらり

如竹 おー、おー。(と、吃驚した気持ちを静めたが少し腰が引けている) お前がお前が山の神、それとも山の神に仕える巫女なのか? いやそんなことはどちらでもいいことじゃ。

はる ……。

如竹 村の衆に年貢を納めさせるための方便で一七日山に籠ればと…しかしまさか本当に、いやこれもきつと先程と同じ幻に違いない。

はる ……。

如竹 (気持ちを整理するかのように) 子どもん頃亀女さんち占い婆がおってな、山鳴りを鎮めた時に山ん神様と話しをしたっち、おいはそんななん嘘じゃると言った。が、おいは今まで何度かお前を見て、お前の声をば聞いていたっちゆうことか?

はる わたしもお前の声を聞いていた、心の奥深いところの声をな。

如竹 ではなぜこうやって山を登って来たかも知っておるはず。村の衆に木を伐る許しを示す何か印が欲しい。

はる その前に聞きたい。

如竹 何じゃ?

はる お前にはあの木が伐れるか?

如竹 いいや一人では無理だ、しかし何人かで力を合わせれば、上の方のまっすぐなところなら伐れると(さつき日流から)聞いた。そして山の中で割って平木にして運び出す。そうすれば年貢で出せる。

はる そのようなことを聞いているのではない。

如竹 ……?

はる 何のためらいもなく斧を入れることができるのか、ということだ。

如竹 ……。

はる 何のためらいもなく斧をいれられるのか? やってみるがいい。

如竹 い、いや、誰だってこの太か木に斧を入れることにためらいを持つ、じゃろ。

はる 持つじゃろ!

如竹 おいは村の衆のそんなためらいの気持ちも知らんで、今まで木を伐って送ってく

れっち何度も何度も頼んだ。この島には宝があるということを得意げに皆に知らせてまわった。しかしおそらくおい達の祖先よりもずっとずっと以前からこの島におったものに斧を打ち込むことの痛みは今初めて知った。(と、泣くが少ししいや、今更、何を今更こげなことで迷っておるのじゃ！ 村の衆が望んでいるのは安心して木が伐れること、そしておいは神さまの許しを持って山を下りるのが役目なのじゃ。(手をついて) 木を伐らせてもらえんか。百姓が丹精込めて米をつくるように、木も一片も無駄にせず大事に大事に扱う、じゃから木をこの山の木を伐ることを許してほしい。(と、頭を下げる)

はる 許すも許さないもない！ ……わたしには関係のないことだ。

如竹 それでは困るのだ。

はる 年貢を納めさせる方便に神の名を使うな。

如竹 しかし、村の衆は、神を……。

はる お前はわたしを祀ることができるか？

如竹 祀ることが、できるか？

はる 結ばれた土地の記憶と時の記憶をほどくのは言葉だ。しかし人間は文字や言葉と引き換えに慎みを忘れてしまう。慎まぬ者は神を祀ることはできない。

如竹 ……。

はる もう一度聞く。お前はわたしを祀ることができるか？

(と、木の中に消える。その時シャクナゲの一枝が如竹の手元に)

しばらくして立ち上がりおもむろに足拍子を踏む。暗転の後すぐに明転。屋久島の村人が防波堤の石積みをしている。

村人1 日章さんが戻ったど。

村人2 如竹先生が帰って来た。

如竹 皆で何をしておるのじゃ？

村人3 見たらわかるやろ、大波を防ぐ石積みをしちよるんじや。

村人4 山から水を引く水路の造り方を如竹先生が教えてくれたからな、今度は皆で知恵を出して、な。(と、村人3に)

村人3 そうじゃ、それとすぐに山さめ逃げられるように道も造ろうって、な。

如竹 そうか、それは良かことじゃ。

村人1 おい達のご先祖さんは、そんな時そんな時で工夫ばして、大風・大雨の自然と折りあいをつけてきたんじやからな。

村人2 海の機嫌が良か時には海の物もらい、山の機嫌が良か時には山の物もらってな。

イネ なあ、如竹先生、何でんかんでんそんな時はそんな時じゃ。

如竹以外の人達ストップモーション

如竹 そんな時はそんな時。はは、ははは、そうじゃな、そうやってずっとずっと昔からなんでんかんでん受け入れて、やって来たんじゃったな。

村人2 なんじゃ如竹先生、一人で何がおかしゆうて笑っておるんじゃ。

ストップモーションがとける

村人4 さあ、日暮れまであと少し、やりきつど。

全員 おお。(と、氣勢を上げる)

如竹 なあ、わしが死んだらここに埋めてくれぬか。

全員 なしてや？

如竹 わしにも、この村を守らせてくれ。

全員 ああ、よかとよ。

舞台上のジャクダンバナ(シヤクナゲ)が咲く
暗転、全員一旦はける。

すぐ後に、テーマ曲の前奏が流れる中舞台明転
役者たちが何人かずつ次々に登場し以下の歌を歌う。

『天よりきたるもの』

海をめぐる 空を駆ける 青の光を羽に宿して
羽ばたきひとつの永遠が 遙けき空の彼方より
子等の額(ぬか)に星落とす

木々は香り 水は清ら くろき艶髪風になびかせ
ほほえみひとつの永遠が 夢のまにまに白波の
さざれ流れ星になる

終幕